

〔中〕 令和七年度 久留米大学附設中学校入学試験問題

国語科

注意 1 解答はすべて解答用紙に記入せよ。解答用紙だけを提出すること。
2 〔一〕～〔四〕の各問いで、字数を指定している場合は、句読点などを含んだ字数である。

〔一〕 設問と解答欄とは、解答用紙(全2の1)にある。

〔二〕 次の各問いに答えよ。

問一 「便」という漢字について、次の問いに答えよ。

- ① 総画数を漢数字で答えよ。
- ② ア～ウの熟語の「●」に、それぞれ適切な漢字一字を入れよ。

- ア「●便」 || 手軽で便利なこと。
- イ「便●」 || 都合のよい機会をとらえて、うまく利用すること。
- ウ「●便」 || ある目的を達するために用いる、都合のよい手段。

問二 次の①～③の「●」に、それぞれ適切な漢字一字を入れよ。

- ① 「身を●にする」 || 苦勞をいとわず一所懸命に仕事をす
- ② 「●が置けない」 || 遠慮する必要が無く、心から打ち解
- ③ 「住めば●」 || どんな土地でも慣れれば、自分の住むと

問三 次の①～③は、ある擬態語の国語辞典による説明である。説明に合う言葉として最もふさわしいものを、それぞれ後のイ～リから一つずつ選び、記号で答えよ。

- ① 物事が勢いよく変化してゆくさま。
 - ② 断続して美しく光り輝くさま。
 - ③ 心をこめてくり返し説くさま。
- | | | | | | |
|---|------|---|------|---|------|
| イ | めらめら | ロ | きらきら | ハ | ぎらぎら |
| ニ | ぐんぐん | ホ | ずんずん | ヘ | とんとん |
| ト | せつせつ | チ | こんこん | リ | めんめん |

問四 次の①・②の傍線部について、同じ用法のことばを含むものを、それぞれア～オから一つ選び、記号で答えよ。

- ① A国で地震があったそうだ。
- ア まだ使えそうだ。
- イ 明日は雨になりそうだ。
- ウ この本はむずかしそうだ。
- エ 早く帰った方が良さそうだ。
- オ 今年は豊作だそうだ。

〔三〕 次の文章をよく読んで、後の問いに答えよ。

折りにふれ人に語っていることであるが、私にはこんな経験がある。学生時代のことであった。四国のある山村を タズね、昔からの山の樹の伐り方を聴きだしていたとき、その人(代々樵)をする家柄だといっていた)が私に伐採の技術や手順についてひとしきり語った後、一言こう付け加えた。「この方法が一番能率的なのだ」と。

実は、彼が私に語った方法とは、尾根や沢の地形を考え、樹の育ち方や種類の構成を尊重した、現場対応的な極めて複雑なものであった。大学で「規格化」された理論や技術ばかり教えられていた私の考えでは、むしろ「能率的」とは逆の方法としかいえないものであった。

① そこで私は、疑問の旨を彼に伝えた。彼はそのとき、誠に理解しがたいという表情を浮かべつつ、私に諭すように訥々と語った。その大要は、次のようであった。

山の樹を伐るとき、最も大事なものは、次にどこでどれだけ伐ることができか、山の性質に合わせてしっかりと把握しておくことだ。そして、樹の成長状態を、遠くからでも判断できる状態にしておくことだ。仮にも将来のはっきりした見通しなしに、今の伐採箇所や伐採量のみにとらわれて森を再生できなかったとしたら、山仕事は中断することになり、それほど非能率なことはなからう。山で樹を伐るとき、非能率さとは、そういうことなんだ。

ここに彼の論理があり、それは確かな正論であった。そして、彼の意見を正論として認識するためには、「伐採をいかに持続するか」を、森の状態に即応して現場判断することを第一義の価値とする認識基盤を、共有していなければならぬ。

もしも、「能率」の意味を、別の(むしろその方が世間一般、オーストックスであろうが)基準である② 工業の論理に当てはめれば、このときの彼の言葉は、まったく理解しえないであろう。

「能率」の一語の示す越えがたい溝の前に、私は A 立ち尽くすのみであった。

私たちは知らない間に、自分たちの日常の状況に合わせた価値観を身につけてしまっている。それが、実は半面(反面?)の事実しか示していないことに、普段はまったく気がついていない。

知識の体系とは、そんなものである。B 片々たる知識の切れ端であれば、なおさらであろう。多くの場合、このことを配慮せず、また異なった状況に対して、異なる対応を求めもせず、自らの知識や価値観への追従が一方的に展開される。

既成の知識の集積は、ある場合には「知力」の脆弱さの裏返しに過ぎないものに墮し去ることに、多くの人は気がつかない。一般化され、あたかも「真実の理性」をかぶせられることにより、疑いの中に事実を求めようとする「知性」の働きをしばしば抑圧するのが、既成の知識の体系である。

③ 状況から常に新しい「知の源」を得ることが、本来の「知力」の活動にとってC 大切なことか、b サツコンの環境問題に対する議論の数々に思いを致しつつ、改めて確かめていただきたいと、私は思う。

「生命力」なき生命は、無意味である。同様に、「知力」に支えられぬ知識は、無力である。私たちは、気づかないままに「倒立した知識」の虜になってはいないだろうか。広く、そして遠くにシヤを持つ中で、今一度自らの価値観にケンショウのヤスリをかけてみてはどうであろうか。環境問題の多くは、そのカテイでまったく新しい局面を迎えるであろう。

(林 藤『森の心 森の智慧』より)

問一 波線部 a k e のカタカナを漢字に直せ。

- a タズ(ね) b サツコン c シヤ
- d ケンショウ e カテイ

問二 本文中のA C に入る言葉を、次のイトチからそれぞれ一つずつ選び、記号で答えよ。

- イ なお ロ まして ハ いかに
- ニ ただ ホ ついに ヘ せめて
- ト また チ とても

問三 傍線部①「そこで私は、疑問の旨を彼に伝えた」とあるが、どのような「疑問」か。説明文のI II を、それぞれ十字以内の表現で埋めて答えよ。

「彼」が「私」に語った方法が I ものであるがゆえの、II ではないかという疑問。

問四 傍線部②「工業の論理に当てはめれば」とあるが、ここでは具体的にどうすることか。説明文のIII を、本文中から抜き出した十字以上十五字以内の表現で埋めて答えよ。

山の樹の伐採において、III を最優先して考えること。

問五 傍線部③「状況から常に新しい『知の源』を得ること」について、山の樹の伐採の場合ならどうすることかを具体的に述べた表現を、本文中から三十五字以内で抜き出し、最初の七字で答えよ。

問六 傍線部④「『倒立した知識』の虜になってはいないだろうか」とあるが、「『倒立した知識』の虜になつてい」とはどういう状態か。次の説明文について、IV は後のアウオから一つ選んだ記号で、V は三十字以内の表現で埋めて答えよ。

自分が持っている知識や価値観がIV 的だと勘違いしてしまい、目の前の状況が変化しているのに、V ことが出来なくなっている状態。

- ア 進歩 イ 絶対 ウ 個性
- エ 総合 オ 根源

問七 次のアウカの中から、本文中で言われている内容と一致しているものを二つ選び、記号で答えよ。

- ア 四国の樵が語った、山の樹を伐るとき「能率」を保つには、山全体の時間的な変化を考えなければならなかった。
- イ 四国の山村での、山の樹を伐るとき「非能率さ」の原因は、樹を伐る人々の正論ばかりを重んじることにあつた。
- ウ 学生時代の筆者は、四国の山村で聴いた山の樹を伐るとき「能率」についての説明を、全く理解できなかった。
- エ 私たちが日常で身につけた知識や価値観は、「知性」の働きを抑圧するばかりで、実際には決して役立たない。
- オ 「真実の理性」などの表現は、既成の知識の体系が私たちを事実から遠ざけがちであることを、見えにくくさせる。
- カ 現在の環境問題は、私たちが既成の知識を自然環境に対して押しつけることをやめれば、たちどころに解決する。

問八 本文の内容に即して前半部と後半部との二つに分けると、後半部はどこから始まるか。最初の七字を抜き出して答えよ。

問九 本文の前半部と後半部との、構成上の関係について説明した次の文のVI を五字以内、VII を十五字以内で埋めよ。

筆者は、私たちの「知識や価値観」と「知性」との関係性について論じる本文において、前半部では山の樹の伐採という一つのVI を取り上げ、後半部ではそのVI をVII 話に広げて議論を展開した。

四 次の文章をよく読んで、後の問いに答えよ。

絵を描くことが好きな小学五年生のマコは、周囲の住民から不審に思われている吉本太が開講している美術教室に通い、吉本と少しずつ交流を深めていた。ある日、同級生の修から「怪しげなオッサン先生の所に通う変人」として扱われ、怒ったマコは修に暴力をふるってしまふ。その帰り、母に「分かってもらえない相手にも、表現によって伝えようとすることを諦めないでほしい」と言われ、マコはその意味がよく分からないながらも、母の言ったことを守ろうと決心したのであつた。

学校へ行くと、マコは家や吉本太美術教室にいる時のように、自由なふるまいができない。先生にしつこく質問したり、授業中にうろろ歩き回ることも少なくなつた。クラスには流行りのドラマや流行歌に詳しい華やかな女子グループと、あまり目立たない地味なグループがあった。マコはどちらにも属することはせず、あえてみんなと仲良くするように心がけた。そうしてみると、あんなに一人になるのが怖かつた。一人になりたいと思うことが多くなつた。集団から疎外されることと、自ら一人を選ぶことはまったく違うことに気がついた。オッサンはあえて一人でいることを選んだのだろうか。

担任の清水先生には「麻子さんは最近お姉さんになって、みんなと平等に仲良くできるしすばらしいですね」と言われたけど、内心マコは我慢ばかりしていた。頭ではわかっているけど、オッサンのように「まわりにどう思われても上等だぜ」なんて、なかなか思えない。毎朝教室の扉をあけると、学校用の自分に変身するために、えいやと少しだけ装った。だから大人にほめられても①違和感を感じてしまう。初めは小さかつたズレは、マコの中で少しずつ大きくなつていったけれど、その変化に気がついてくれる人は、まわりにはいなかった。マコは校門を出たとたん、いつものノーテンキでユニークなマコに戻るからだ。

② 図画工作の時間は二時間続いた。マコは学校の図工の時間はあまり好きではない。合田先生という白髪のおじさん先生は、モゴモゴ滑舌が悪くて何を言ってるかわからないし、とにかくモチーフトレーマもマコにとっては退屈だった。吉本太美術教室で鍛えられているマコの描く絵は、そりゃあ学校内では()を抜いてじょうずだった。合田先生はいつもマコの絵をほめてくれたけれど、マコはそれもあまりうれいと感じていない。なんだかピントがずれているようで、わかつてもらえている気がどうしてもしなかつた。

その日の図工の授業は五、六時間目だった。校庭の花壇に面した図工室の窓からは、背伸びした大輪のひまわりがまぶしい。「自分の心を絵で表現してみよう」というテーマだった。マコは久しぶりにおもしろそうなテーマだと体を前のめりにした。合田先生は白い四つ切り画用紙を子どもたちに配ると、「人間の感情には喜怒哀楽があります。四つの中から一つ選んでその感情の色や形を想像して描いてみましょう。使っているのは鉛筆とクレヨンと水彩絵の具、難しいテーマだけど挑戦してください。画用紙は横描き。描き終わったら右下に名前。はいスタートね」と、やっぱりモゴモゴと説明をした。

③ 図工室の木製のズッシリした机の天板をじつと見つめてから、マコは自分のどんな感情を描こうか決めた。それから画用紙を縦にすると、真っ赤な絵の具と、あずき色の絵の具を使って、上に向かって長く続く階段を描きだした。階段の一番下にはこちらをにらみつけて立っている水色のワンピースを着た幼い少女を描いた。赤い階段はみんながびつくりするくらいしつこく赤色を何度も重ねる。絵の具の上からクレヨンを重ね、また絵の具を重ねる。同じ色をずっと同じ場所に塗り続けていると、ある瞬間、色の中に深い穴のような空間が生まれる、とオッサンが言っていたのを思い出す。穴に吸い込まれそうになるまでひたすら塗り重ね

た赤は、ゾツとするような迫力を帯びた。少女の瞳はみんなが怖がるくらい鋭く美しく描こう。彼女のぬれたようなまつげの一本一本まで細筆で慎重に描く。授業と授業の間の中休みの時間も、マコは作品に没頭した。それは、小学校五年生が描いたとは思えない大人びた絵に見えた。

キンコーンカンコーンキンコーンカンコーン。
「はい。できた作品を提出してください」

④ 授業終わりのチャイムが鳴ったが、マコはまだ描き終えていなかった。④ 我に返つてまわりを見渡すと自分だけ縦で描いてしまっている。みんなにわからないように絵を裏返しにすると、横に向けて先生の机の上にスツと提出して図工室を出た。

「みなさん、さようなら。先生、さようなら」
帰りの会が終わわり、日直が号令をかけて子どもたちがそれぞれ帰り支度を始めた。

「マコちゃん、今日、あさこちゃんと、ちえちゃんと、家でスパーマリオ大会するんだけど、マコちゃんも遊びに来ない？ それにお菓子も持ちよつて、みんなで食べようよ」

人なつっこい笑顔でマコに声をかけてきたのは、クラスメイトのますみちゃんだった。

マコが、学校で目立たないように心がけてから、こうして時々遊びに誘ってくれるクラスメイトができた。誘われるのはうれしかつたけれど、ファミリコンピュターの画面も、にぎやかなゲーム音楽もマコはなぜか頭がクラクラしてしまうので苦手だった。友だちといえるのは楽しいけど、⑤一緒に遊んだ帰り道はズシンと肩に何かのついているように重かつた。それでもせっかくなすみちゃんが誘ってくれてるんだから、行こうと決めて笑顔を作つたその時だった。

「麻子さん、この後、図工室まで来てください。合田先生からお話があるそうですよ」と担任の清水先生から声をかけられた。

⑥ マコはますみちゃんに向けた笑顔を崩さないまま眉間にシワを大げさに寄せて、顔の前で手を合わせて、

「ごめん、先生に呼び出されちゃった。今日は一緒に遊ばなそう。実は今日の図工で描いた絵、私、間違えて縦描きにしちゃつたら、多分それで呼び出されたんだと思う」

となるべく明るくていねいに断つた。
「そっか。残念。次は遊びに来てね！」

ますみちゃんはランドセルを持つと、手をふつて教室を出ていった。

トントン。

⑦ 図工室の扉をノックするとすぐに合田先生の「はい」という声が聞こえてきたので、ガラガラと教室の引き戸をあけた。

中央の机に座っている合田先生とブルータスの石膏像がギョロリとこちらを見た。窓から差し込む真夏の西陽に照らされて、さつきマコが授業で描いた赤い階段と少女の作品が一枚だけ机の上にポツンと置かれていた。図工室がいつもよりずっと広く感じられる。

マコは先生に向かい合うように席に着くと、先に話し出した。「すみません。横描きなのに間違えて縦描きに描いてしまいまし

た。家で描き直してきます。しかも、まだ途中だし」

先生は首を横にふると、マコの顔をのぞき込む姿勢になった。「いやいや、縦に描いたことくらい本当は大したことではないよ。廊下に飾る時に先生が飾りやすいから横描きって言っただけなんだし。それより、この作品、とてもよく描けているし、すばらしい。本当に美しい赤だよ。でもね、見ていてちよつと⑦きみのことが心配になったんだよ。麻子さんは、何か不安なのかなって。何か迷っていたり、つらいことがあるのかな？ この階段の下にいるのはきみ自身だろう？」

マコはびつくりした。確かにマコは学校にいる時の自分の気持ちを絵に描いた。どうせ伝わらないと思っていた合田先生が、絵を見てマコが選んだテーマを言い当てたのだ。

「学校にいる時の気持ちを描きました。喜怒哀楽の四つの中から選べなかったから、それもルール違反なのだけど。先生には伝わってよかったです。わかってくれてうれしいです。私、将来画家になるので、このくらいは絵で伝えられないと！」

マコはわざと明るくケロリとそう言いはなった。

マコは少し高揚して、そして満足していた。先生に心配してもらったからではない。気持ちを理解してもらったからともまったく違う。自分の描いた絵が人の心にどんな形であれ引っかかりを持ち影響したんだ、と思えたからだ。

あの日、ママがした話は本当だと思った。描くことは時に暴力や言葉よりも、強い力を持つ。⑧マコがマコらしく自分を表現できる可能性があることを、初めて実感した出来事だった。

(蟹江杏『あの空の色がほしい』より)

問一 波線部「()」を抜いてじょうずだった」の空欄に適切な漢字一字を埋めよ。

問二 傍線部①「違和感を感じてしまう」とあるが、それはなぜか。説明文の空欄を適切な表現で埋めて答えよ。

大人にほめられている自分は、であるから。

問三 傍線部②「マコは学校の図工の時間はあまり好きではない」とあるが、その理由を説明した次のア～オのそれぞれについて、正しい場合は「○」、誤っている場合は「×」を書け。

- ア 授業中に合田先生の言うことがよく聞き取れず、その指示がきちんと理解出来ないから。
- イ 吉本太美術教室で習ったことと、学校で合田先生から習うことが違っていてとまどうから。
- ウ 合田先生が自分の絵をほめてはくれるが、本当には理解してくれていないように思えるから。
- エ 学校の授業で合田先生の出す課題が、マコにとっては退屈で、興味を持ってないものだから。
- オ マコの画力は周りより上なのに、みんなに合わせて同じテーマを選ばなければならぬから。

問四 傍線部③「マコは自分のどんな感情を描こうか決めた」とあるが、マコは何を描いたのか。本文中より十五字以内で抜

き出して答えよ。

問五 傍線部④「我に返ってまわりを見渡すと自分だけ縦で描いてしまっている」とあるが、「我に返」る直前までのマコの様子として最も適当なものを、次のア～オから一つ選んで記号で答えよ。

- ア 課題として出されたテーマの意味をきちんと理解した上で絵を描くことを心がけ、何度も試行錯誤を重ねていた。
- イ 課題として出されたテーマが難しかったため、何度も色を塗り直しながら、絵の完成を目指し取り組んでいた。
- ウ 課題として出されたテーマに本気で取り組んでおり、周囲が気にならないほど絵を描くことに夢中になっていた。
- エ 同級生の誰にも描けないような素晴らしい絵を完成させ、合田先生に認めてもらおうと必死に取り組んでいた。
- オ 吉本太美術教室で習ったことを実践し、自分の実力がどれほどであるかを確認するために懸命に取り組んでいた。

問六 傍線部⑤「一緒に遊んだ帰り道はズシンと肩に何かのつているように重かった」とあるが、それはなぜか。説明文の空欄を適切な表現で埋めて答えよ。

友だちといるのは楽しいが、から。

問七 傍線部⑥「眉間にシワを大げさに寄せて」とあるが、マコが、ますみちゃんに対してそのような態度をとったのはなぜか、分かりやすく説明せよ。

問八 傍線部⑦「きみのことが心配になった」とあるが、どういうことか。説明文の空欄を二十字以内の表現で埋めて答えよ。

合田先生が、マコがと心配しているということ。

問九 傍線部⑧「マコがマコらしく自分を表現できる可能性がある」とあるが、ここではどういうことを表しているか。最も適当なものを、次のア～オから一つ選んで記号で答えよ。

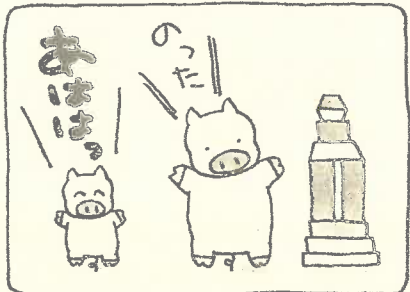
- ア 自分の正直な気持ちを一生懸命に描いた絵は、その絵を見た人がどんな立場の人であっても、その心にきちんと届く可能性があること。
- イ 自分の力を信じて心を込めて一生懸命に絵を描けば、自分の本当に伝えたい思いを表現することができる可能性があること。
- ウ 時間をかけて集中して描いた絵に込められた気持ちは、いつもは分かり合えないような相手にも理解してもらええる可能性があること。
- エ 自分が本当に描きたいものを夢中になって描いた絵は、分かってもらえない相手でも、その心に触れ動かすことができる可能性があること。
- オ 本当の自分をさらけ出して真剣に絵を描けば、苦手だと思っていた相手とも心を通い合わせることができる可能性があること。

*の欄には記入しないこと。

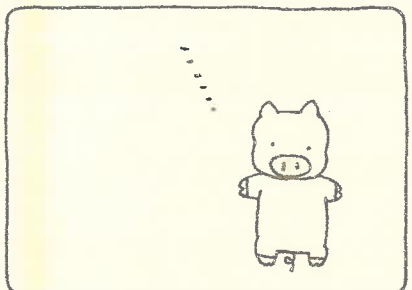
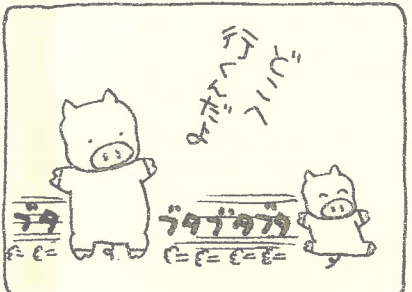
受験番号

□ 次のマンガ【A】【B】を読んで、後の〈問い〉に答えよ。

【A】 子供の偉大さから学ぶの図 その1



【B】 子供の偉大さから学ぶの図 その2



(小泉吉宏『ブッタとシッタカブッタ1 こたえはボクにある』より)

〈問い〉マンガ【A】【B】両方の場面を通して、大人のブタが子供の様子から学んだことを、百五十字以上二百字以内の自分の言葉で説明せよ。

Handwriting practice grid with 15 vertical columns and horizontal lines.

* [Blank box for student use]

* [Blank box for student use]

*の欄には記入しないこと。

受験番号

一 解答は解答用紙(全2の1)に書け。

問一 ①

② ア

③ 便

イ

便

ウ

便

問二 ①

②

③

問三 ①

②

③

問四 ①

②

問一 a

b

c

d

e

問二 A

B

C

問三 I

II

問四

問五

問六 IV

V

問七

問八

問九 VI

VII

問一

問二

問三 ア

イ

ウ

エ

オ

問四

問五

問六

問七

から。

問八

問九

*

*

*

*

*

*